追　悼

お別れの言葉

月本　昭男

藤田富雄先生

思いがけなくも，ついに地上でお別れする日が来てしまいました。私ごときが弔辞を読ませていただくなどとは，誠におこがましいことでありますけれども，宗教学を専攻した後輩として，また立教大学でご定年前のほぼ10年間を親しくご指導いただいた者の一人として，お別れの言葉を申し述べさせていただきます。

今から40年ほど前，私どもの世代が宗教学を志しましたとき，東大・宗教学研究室におきまして，宗教哲学ならば藤田富雄と言われておりました。じじつ，私どもの世代は先生のお書きになられたご著書で宗教哲学に触れました。昨日，あらためて先生のご著書『宗教哲学』を手に取ってみますと，初版は1966年の刊行です。そのほぼ10年前，先生は『現代の意識―ヘーゲルを超えるもの』と題するご著書を出版しておられます。先生，35歳のときのご著書であります。その後も，『哲学へのいざない』と題する著書を出され，さらには，脇本平也先生，井門富二夫先生，柳川啓一先生がたと共に『講座・宗教学』の編集に携わられました。『秘められた意味』と題する第４巻は先生の責任編集でありました。

当時の私は，学会などに出席した折に，先生をお見受けしたにすぎませんでしたが，1981年に立教大学でご一緒させていただくようになりましてからは，酒席での振舞い方からはじめて，じつに様々なことを先生から学ばせていただきました。伊勢で学会があった際には，高木きよ子先生，鈴木範久先生などとともに松阪で本居宣長の埋め墓や記念館を訪ね，最後は先生のご案内で「和田金」において舌鼓を打ったことなど，いまでは懐かしく思い起こします。

立教大学での先生は，一般教育課程で「哲学」を講ずることに徹しておられました。学内で，文学部に哲学科を開設してはどうか，という提案があったときも，いや，哲学は一般教育にあってこそ意味がある，との立場を先生は崩されなかった，と伺いました。先生の授業は学生たちの人気の的であり，毎学期，教室は受講生であふれました。学生たちはそれを「藤哲」と呼びならわしておりました。それをやっかむ他専攻の同僚から，藤田さんの授業はマスプロ教育だ，と評されたこともありましたが，そのようなとき，先生は平然として，学生たちにとっては大人数授業も匿名社会を知る第一歩だよ，とお答えになっておられました。

しかし，その一方で，先生は学生たちを愛され，学生の依頼に応じ，いくつものクラブ活動の部長を引き受けておいででした。体育会の合気道部もそのひとつで，ご定年の前年でしたか，合宿中の千葉県の岩井の海岸に私を誘われました。そして，この合気道部は脇本さんが初代の部長であったから，僕のあと

は同じ宗教学を専攻する君に任せたい，とおっしゃられたのでありました。その後，様々な機会に，先生がいかに合気道部の学生たちと卒業後までも人間味あふれる交流をもち続けておられたか，ということを幾度となく知らされたことでした。

また，先生がつねづね自慢しておられたことに，宗教学研究室で同時代を過ごされた赤司，脇本，井門，大塚，安斎，浅野，柳川諸先生方との親しいお交わりがありました。毎年，楽しい会合をもっておられ，些か羨ましくも感じたのであります。誰ともなく，この会は「つむじ曲がりの会」と呼ばれていたと伺いましたが，そうしたお交わりの幹事役は藤田先生が引き受けておられたのではないかと思います。このように，先生は人間関係をじつに大切にされ，いつまでも大切にされる方であられました。ここにご参集の方々もまた，それぞれに先生とのお交わりを懐かしく思い起こされているにちがいありません。先生と親しく接する機会を与えられた者にとって，先生の学問的な業績もさることながら，それ以上に，先生の温かなお人柄に触れさせていただいたことが，かけがいのない人生の宝物となったのであります。

それにしましても，最晩年に病を得られことは，先生にとって不本意また不如意なことでありました。お辛い日々も多々おありではなかったかと忖度いたします。そのなかで先生は，なお絵筆を運ばせ，展覧会まで開かれておられました。しばらく前，偶々，立教大学の近くでお目にかかった折に，最愛の百子奥さまが押される車椅子から優しい笑顔を向けてくださいました。私にとりましては，それが最後に先生と最後に言葉を交わす時となってしまいましたが，少々，生意気なことを申し上げさせていただければ，先生はその時その時を最善と受け止められるオプティミスト，よい意味での楽観主義者であり続けられたのではありませんか。私にとりまして，そのことが先生から学ばせて頂いた最大の宝物であったのではないか，といまさらながら思わせられるのであります。

藤田富雄先生，どうぞ，いまは天にあって地上のお疲れをお癒しください。ここに参集いたしました私ども，それぞれ，先生への深い感謝の念を新たにしつつ，お見送りをさせていただきます。

最後になりましたが，先生が最もいとおしまれた，そして先生を最も愛してこられた百子奥様，お二人のご子息，そしてご親族の上に，天来の慰めとご平安がありますように，と心より念じつつ，拙いお別れの言葉とさせていただきます。

（2010年２月５日）